

=====
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

=====
AA 研共同利用・共同研究課題「死の人類学再考：変容する現実の人類学的手法による探究」2021年度第2回研究会

日時：2021年8月1日（日）14:00-18:00

場所：オンライン開催

使用言語：日本語

14:00-15:00 西井涼子(AA 研所員)

報告：『出会いのあわい 九鬼周造における存在論理学と邂逅の倫理』（2019年）
宮野真生子（堀之内出版）を読んで

15:00-18:00 丹羽朋子（国際ファッション専門職大学）

報告：『急に具合が悪くなる』（2019年）宮野真生子・磯野真穂（晶文社）
を読む—相互生成的生を描く「メッシュワーク」としての往復書簡，総合討論

ディスカッサント：磯野真穂（慶應大学）

宮野真生子『出会いのあわい 九鬼周造における存在論理学と邂逅の倫理』を読んで
西井涼子

要旨

次のはじめの問いを念頭に、『急に具合が悪くなる』（宮野真生子・磯野真穂著）を参照しつつ読む。

- ・宮野が最期まで自己を統御して全うしようとしたことは何か。
- ・死を前にした宮野は、個の生をどのように考えたのか。何がしたかったのか。

I 九鬼周到の人となり

九鬼は「驚き」という情緒から偶然を生きる人間のありように接近する。驚きという情緒を通じ、九鬼は人間の生きる現実が知性と感情の間で形成されることに気づく。九鬼哲学とは、人間の生きる具体的現実（実存）とそこに働く論理の関わりを、偶然性を核として明らかにし、「存在一般」への通路を開く形而上学である。

II 個と普遍の問題

論理的次元の定言的偶然の根柢に経験的次元の因果性を見て、独立の二元の邂逅としての因果的偶然の先で形而上的次元を考える。論理的次元と経験的次元の依存的関係によって、偶然と必然の入れ子構造が成立する。九鬼は偶然性を個と普遍との関係のなかで問う。

Ⅲ 現実をどう捉えるか

現実とは可能性からスムーズに成立するものではなく、無数の抽象的可能性に脅かされ、存在しないことも可能であるという不可能性をくぐり抜け、偶然に生まれおちるものとなる。現実が生まれるその瞬間を捉えようとする。九鬼は論理を人間が生きる現実を象る動的なものと捉え返した。生のただなかで働く論理の形と、その論理によって形作られた現実の多層性。その動性のなかでのみ普遍は見通される。

生の現実とは「無の深淵の上に壊れ易い仮小屋を建てて住んでいる人間たち」論理を働かせながら「仮小屋」を生きていくしかないものである。

Ⅳ 倫理—自己と他者

九鬼が強調するのは、偶然性のもつ他性である。「真の意味の個性性」は、「汝の偶然性」によって開示される。現在の瞬間、私が出会うのは「汝の偶然性」である。自己にふりかかる偶然であれば、自己の歴史性へと繰り込み、「私の同一性」を成立させることもできたであろう。しかし、他者が被る偶然性とは、私の手の届かない他なるものとして現れる。他者と出会い、他者の存在の偶然性を感じ得ることを通じて、自己と他者それぞれの生の足下に潜む膨大な可能性を知る時、閉じた私の同一性にひび割れが生じ、必然の歴史によって規定され、切りつめられていた私の存在が大きく動かされ、新しい局面が開かれていく。それは同時に、私から決して手を触れることも働きかけることもできない他者の存在の偶然性を見る瞬間でもある。私はこの出会いに驚き、いくつもの偶然の重なりあった出会いのかけがえのなさ、他者の存在のかけがえのなさにその身を開くことができる。

* < 念頭においた問いの答え >

- ・ 宮野が最期まで自己を統御して全うしようとしたことは何か
→ 生を言葉にすること、それを誰かがひきつげるように記すこと。
- ・ 死を前にした宮野は、個の生をどのように考えたのか
→ 偶然を受け止めるなかでこそ自己と呼ぶに値する存在が可能になる。その自己は、「根源的出会い」において、他者を信頼し、世界を愛することができる。

Ⅴ 宮野という哲学者の生のあり方

* 九鬼と宮野の違い

九鬼は、「媚態」＋「意気地」・「諦め」、つまり、他者を巻き込みたくないという態度をとっているように思える。一方、宮野は、他者を巻き込みつつ生を全うする、そうして他者の生につながることを信じる。世界によせる信頼と愛がその思考の特徴であろう。

『急に具合が悪くなる』を読む—相互生成的生を描く「メッシュワーク」としての往復書簡

丹羽朋子（国際ファッション専門職大学）

本共同研究がテーマとする「死」という現象を、人類学的にどう記述するかという課題の方法論を考えるにあたり、参考となる文献として、宮野真生子・磯野真穂著『急に具合が悪くなる』（2019年、晶文社）（以下、「本書」と表記）をとりあげ、以下の3部構成の発表を行い、共同研究メンバーと議論を行った。

【1】今日の本書をめぐる「私」の語り方について

【2】本書の構成について—「メッシュワーク」と「ネットワーク」（インゴルド再訪）

【3】コロナ禍の美大4年生たちはどう読んだか

本書は、2019年4月から7月に哲学者の宮野真生子氏と人類学者の磯野真穂氏の間で交わされた計20通の書簡を書籍化したものである。宮野氏による「はじめに」（P.9-11）によれば、この往復書簡は、自身が患うガンをいかに捉え、さらにより広く、病を抱えて生きることの不確定性やリスクについて、医療人類学を専門とする磯野氏とのやりとりを通じて深めていくという学問的な野心から企画されたものだという。

本発表ではまず、【1】本書を読むにあたり、発表者がどのような「当事者性」を持って（あるいは、持ち得ないことに悩みながら）読んだかを示すために、発表者自身がこれまで身近な人々の死去や人類学的フィールドワークで出会った死をめぐり経験を列挙し、それらと、本書で描かれる宮野氏の死に近づいていく壮絶な経験との相違について述べた。さらに、本書を新型コロナ感染による災禍のさなかで、美術大学の4年生ゼミの「課題図書」として読んだ経験から、日常生活における身体的な制約や偶然自らを襲った不条理な不運／不幸をいかに思考するかといった問題へと、本書の議論が敷衍されたことを紹介した。

つづいて、【2】発表者がとくに重要だと考えた本書の2つの論点（①医療的語り、役割＝「点」と化す固定的な関係性を生きることに対する、②「にもかかわらず」そうなっていた＝偶然性と運命）を中心に、各章の概要を整理して提示した。さらに、著者たちが書簡を交わす＝関係性が変化する時間の蓄積のなかで、書簡の形式自体が変化していく仕方について、とりわけ二人の生の軌跡（ライン）が混ざり合う場所に立ち上がる「宛先」（名指し）と「差出人」（名乗り）の表記のあり方に着目して論じた。

そこから本書を、複数の書き手が互いの思考や日常生活などをとり込みながら記録を綴り合わせる「書簡」という独特のかたちをもって、現在・過去・未来に出会うモノゴトとともに変化する「他者」（書簡のやりとりの相手）と、そのやりとりの中および外で自らもまた変化し続ける「自己」、双方の相互生成的生の絡み合いを「メッシュワーク」（T.インゴルド）的に描き出した画期的な民族誌として読みうることを指摘した。また、宮野氏が九鬼周造の哲学から導き出した「偶然性」の概念や、自己と他者の「二元的動的可能性」（「驚き」「媚態」「意気地」「諦め」といった生成する関係）をめぐり議論、本書の最終部で展開される時間の「厚み」についての思考等を、インゴルドの提唱する人類学的実践と縁り合わせ

ることで、死を人類学的に記録する描き方そのものを刷新しうる可能性を示唆した。

最後にその後の研究会参加者との議論に向けた話題提供として、【3】2020年5-7月の時期に美術大学の4年生が本書をどう読んだか具体的な感想を取り上げ、本書の各所で展開される思考と、コロナ禍で行動を制限され、人生を翻弄される経験のなかで読み手が紡ぎだした思考との重なり合い等について紹介した。